

コースの企画の根底にある。

筆者が参加したプロジェクトでは、この目的を達成するために、従来から多くある単発の講座や、講師が講義をする一方通行の“福祉の講座”とは本質的に異なる体系的でユニークな内容のカリキュラムを組み立てた。本コースは、初級、中級、上級のレベルから成り、初級で「自分自身を知り」、中級で「より有効なコミュニケーションスキルを身につけ」、上級で「現場で初級、中級の学びを生かし人と協働する」という3層の目標が設定されている。つまりあらゆるレベルの対人援助の基礎として自己覚知を重視し、まず初級の1年をかけて自己理解にむけた様々な体験ができる内容を練り上げた。以下に具体的なカリキュラムについて述べる。

## 2. ヒューマンサービスコース初級プログラムの実施目的

初級プログラムの目的は、大きく3つに分けられる。社会福祉における対人援助に関する基礎知識の習得、実践レベルの技法を通じての人間理解、つまり様々な演習等の体験を通じての理解、そして援助者としての自己覚知である。いうまでもなく、初級における最も大きな目的は自己覚知にあるが、自己を知るといふ学びのためには、自分の体験と共にそれを裏付ける概念学習も欠かせない。知識と体験が統合されてより現実的な学びが得られる(國分, 1991)からである。

## 3. 初級コースカリキュラムの特色

### (1) 「つながりとかかわり」をキーワードとしたわかりやすい内容の構成

「自分自身を知る」ことは決して自分ひとりだけではできない。人は意識するしないにかかわらず、自分と自分自身、自分を取りまく他者や環境と様々なつながりをもって生きている。そうしたつながりを意識したり、つながりのありかたに変化がおこったときに、そこでの自分のかかわり方に目をむけることができる。

まず①自分と自分とのつながりに目を向け、②そうした自分は他者とのようにつながっているか、さらに③自分の感性や五感に目を向け、ふだん多用している知的なレベルではなく、感性的な

レベルで自分や自分を取り巻く人やモノとのつながりを体験し、その上で初めて④コミュニケーションスキルとしての自分と人とのかかわり方について学ぶという段階をふまえている(資料1)。これは自分を中心とした同心円を広げていくような展開をイメージすることで、各講座の位置付けやねらいが理解しやすくなり、また①から③の段階で、自分自身のあり方、価値観などの自己理解が深まってこそ、本来的なコミュニケーション(共有化)が可能になり、よりよい援助者としての資質の向上になると考えるからである。

### (2) 受講者の主体的な参加、「今、ここ」での体験を前提とする体験学習プログラム中心の展開

すでに述べたように、自己覚知のために必要なことは、自分自身とそれを取り巻く人やモノとのつながりを何らかの形で体験し、そこに目をむけてみるということである。そのために、大学等の通年の授業回数に準じた24回の講座の約3分の2にあたる15回が、ラボラトリー・メソッド(津村・星野, 1996)、あるいは構成的グループ・エンカウンター(國分, 1992)の考え方による参加体験型の学習プログラムとなっている。

これらの方法は、その場で展開されることの目的が明確であること、参加者の主体性と自発性が重要視されること、プログラムの流れが十分にデザインされていること、参加者の体験を実生活の場面に応用可能な学びにつなげることなどを特徴とする。そこでは①具体的な「いま、ここ」での体験→②そこでのプロセスをみる→③プロセスについて考える→④仮説をたてる→①'新たな体験を試みるという4つのステップをふむ体験学習の循環過程と呼ばれるモデル(津村, 山口, 1992)に従って、参加者のその場での体験をベースにした学習体験が展開される。各回の具体的な流れは、ワークやエクササイズと呼ばれる個人または小グループでの演習、ふりかえり用紙への記入、グループや全体でのわかちあいを通じてのふりかえり、最後に体験からの学びを理解する概念的枠組みを提供するための小講義という構成になっている。